

家族への関わりを通じて感じたこと 戸塚病院 2階病棟

結婚、出産を経て一度は離れた看護の仕事でしたが、復帰後10年が過ぎました。当内科病棟では入院患者様の高齢化により、認知症による不穏行動や意思疎通が困難な患者様が増えつつある中で、急性期治療を必要とする患者様やガン末期の患者様など、幅広い専門知識や技術も求められます。そして時には、家族に対する深い関わりが必要になるケースも少なくありません。

そんな家族との関わりということでは、30代のダウン症のAさんが重症肺炎で入院され、人工呼吸器を装着していた時にお母さんが私に話して下さった『子供に対するあつい思い』が今でも忘れられない場面です。この時のAさんの病状はかなり厳しく、主治医からも『もしかしたら最悪な事態になりかねない』という話がされていました。人工呼吸器につながれ、鎮静剤で眠らされているAさんの横で『今日は目を開けてくれない』と落ち込むこともありましたが、また『この子は良くなりますよね？治って、また笑顔が見られますよね・・・？』と涙ながらに何度も聞いてくることもありましたが、お母さんからは『この子の周りの子供たちが、亡くなってきたのをたくさん見てきた・・・』という話を聞いていたため、ダウン症の子を持つ親として、年齢的な限界を常に覚悟しながら生きてきたのかなと思っていましたが、主治医の病状説明には、どこか聞く耳を持たないような感じでした。重症だったAさんの病状は徐々に回復し、人工呼吸器もはずすことができました。そしてAさんは笑顔で歩いて、母や兄と退院して行きました。

Aさんに対して私たち看護師に特別な関わりがあったとは思えませんが、30年間を共にしてきた我が子に対し、お母さんは『日々、この子の笑顔が私に力をくれた。10年前に夫を亡くしてから、家族みんなを笑顔にしてくれた。』という話をして下さいました。Aさんの生命力と母の愛情の深さが、きっとこの日を迎えさせてくれたのだと思います。『この子の笑顔をまた見られますよね・・・』と言ったお母さんの涙を思い出すと、私もまた涙が出てしまうのです。私は看護師の仕事が大好きです。科学的根拠に基づく問題提起は苦手で、自分の看護について『看護と介護の違い』を考えさせられることもあります。ですが私としては、苦痛や苦悩を取り除く援助、療養上の世話をしていくための、そこに対する思いは一緒だと思うのです。今回の事例を通し、いかに家族の思いが患者様を支えているかを学びました。看護師の思いと、家族の思いが一緒になって看護できるように、家族への関わりも大切にしていきたいです。

